

青年期における友人関係とアイデンティティについて

— 共感性と自己の感情体験を中心に —

大 崎 園 生

I 問題と目的

エリクソンが青年期の発達的特徴としてアイデンティティ形成の概念化を行って以来、数多くの研究が行われてきている(鏑・宮下・岡本, 1997参照)。そのなかで近年、男性はintrapersonalな領域において、女性はinterpersonalな領域において、アイデンティティが問題になるとされるようになった(Archer, 1992)。その後男女の二分法じたいへの批判が展開されるようになる(Archer, 1992等)。そしてinterpersonalな領域が、女性のアイデンティティ形成に特有な重要性を持つのではなく、男性のアイデンティティ形成にとっても重要なものであるという指摘が出るようになるという。杉村(1998)はこうした動向をふまえ、アイデンティティとは世界(=身近な他者)と自己との関係のあり様そのものであるという発想への転換が必要であるとした。我が国でも、対人関係の視点からアイデンティティ形成を理解しようとする動向が近年非常に強まっている(岡本, 1999)。青年期における研究としては、石谷(1994)、金子(1995)、谷(1997)があげられる。これらの研究ではアイデンティティ確立を自分の欲求や関心を認識し自分なりにそれを実現していくこと(これを「個で在ること」と言い表しておく)と考え、その形成プロセスが対人関係のなかで他者の欲求や関心に気付き、親密な関係を形成・維持しながらそれを自分の生きることへ統合していくこと(これを「関係に在ること」と言い表しておく)と葛藤しているとしていたが、杉村(2001)は、自他の視点という側面から「個で在ること」と「関係に在ること」とが同時的な事象であることを明らかにした。

ここで、青年期において「友人」は非常に大きな位置を占めると考えられる。友人関係とアイデンティティとの関連にかかわる要因を検討した研究はこれまであまり多くない。宮下・渡辺(1992)、宮下(1998)、白鳥・清水(2001)などの研究では、アイデンティティの確立には友人に対する信頼感や友人との関係に対する安定感が重要であるとされており、こうした関係を形成するための要因が必要となってくると考えられる。

一方、実証的研究ではないものの、心理臨床の経験から無藤(1999)は、「自分というもの」の成立について、他者とのかかわりのなかでそれに触発されて自分自身の望みや癖や感情や考えといった諸点に気づき、「自分と

いうもの」を感じとっていくプロセスを想定しているという。このプロセスは相互的に促進されるものであり、「自分」の感覚の基盤が成立するとき、他者についてもそれらを持った存在であるという感覚が生じる、その過程を相互に促進し合う関係を持つかどうか、青年期におけるアイデンティティ形成において重要な問題になっているとしている。

このような考え方からみて、自己の感情を認識し感じとすることは、「個で在ること」の基盤となり、同時に他者の感情を認識し感じとることと連動し「関係に在ること」をも成立させているといえる。この2つはそれぞれ「自己の感情へのかかわり方」と「共感性」という個人の特性として捉えられ、ともに他者との親密で暖かな人間関係を築くのに重要な役割を果たしていると考えられる。したがって、友人との肯定的な関係にこの2つの要因が密接に関わっていると考えられる。そこで本研究では「自己の感情へのかかわり方」と「共感性」がアイデンティティに関連していることを第一に検討していく(研究1)。さらに、このような関連を促進するような友人関係のあり方を、調査協力者にインタビューを行うことによって探索的に検討していくことにする(研究2)。

II 研究1

<方法>174名の大学生に対し「共感性」「自己の感情へのかかわり方」「アイデンティティ」が質問紙によって測定された。「共感性」は角田(1994)の「共感経験尺度改訂版(EESR)」20項目を、「自己の感情へのかかわり方」は北出(2001)の感情体験尺度(FES)17項目を、「アイデンティティ」は谷(2001a)の「多次元自我同一性尺度(MEIS)」の20項目をそれぞれ用いた。
<結果と考察>「共有体験」と「共有不全体験」の2因子によって構成された「共感性」は、全体では「感情体験」とも「アイデンティティ」とも関連は見られず、「共有体験」因子で「感情体験」と関連が見られ、「アイデンティティ」のなかの「心理社会的同一性」因子と弱い関連が見られた。共感性の類型による分析も行われ、両者の結果から、自己の感情を感じとることと、他者の感情を感じとることは関連があること、他者の感情を感じとることはアイデンティティとは直接関連がないことが明らかになった。「感情体験」は「アイデンティティ」とすべての因子で関連が見られた。この結果から、感情

体験が肯定的なものは、アイデンティティの感覚も強いことが明らかとなった。また感情体験には4つの群が存在することが明らかとなった。そして、自己の感情体験が中程度の場合には、自己の感情に内省的に向き合いそれを理解し把握していくことよりも、適度に距離をおきつつ言葉にしていくほうが、アイデンティティの感覚には影響力があることが明らかとなった。感情体験のあり方によって、共感性とアイデンティティとの関連の仕方は異なることが明らかとなった。感情体験が肯定的なものにとっては、共感性はアイデンティティ感覚に影響を及ぼすが、そうでない者には影響が見られないことが明らかとなった。またその影響には他者の感情を感じとれることが大きな意味を持ち、そのとき「他者の感情を感じとれない」意識はアイデンティティ感覚を強めるのを妨害するが、他者の感情を感じとれることが少ないときには、「他者の感情を感じとれない」意識は自己の個性の意識となってアイデンティティ感覚を強める働きをすると考えられた。

II 研究2

<方法> 9名にインタビュー調査を行った。大学2年生～4年生、平均年齢は20.7歳 (SD=1.12) であった。アイデンティティ感覚の強い者は4名、弱い者は5名であった。友人に自分の内面を話せるか、話せることで自分に変化があったか、相手の感情を感じとれるかの3点を中心にインタビューが行われた。

<結果と考察> アイデンティティ感覚の強い者における友人関係の特徴として、欠点やネガティブなところも含め自分の感じたことをできる限りそのまま言葉にして話し合える相手がいること、受容的に話を聞いてもらえる関係があること、深いかかわりのない友達やそれ以外の人に対しても、自分の思ったことや感じたことを話せること。深く話せる友達関係のなかでパーソナリティ上の変化があること、の4点が見出された。話すことに関してかかわりの深い特定の友達を持っていることはアイデンティティ感覚の強いものと弱い者では同じであったが、その友達に対しアイデンティティ感覚の強い者では、自分の感じたことや思ったことについて、たとえ相手が傷

ついたり、自分に返ってきて自分が傷ついたりすることがあっても、率直に感じたことを相手に伝えようとする姿勢が見られた。河合 (1998) や榎本 (2002) も述べるように、傷つき傷つけながらも自分の内面を相手に伝えようとする関係のなかで、自己の深い部分の気持ちや感情に気が付き、「自分」というものを本当の意味で感じることにつながっているのだと考えられる。また研究1の結果から、傷つくことや傷つけることなど感情的に動揺することを覚悟のうえで率直に感じたことを話すというコミュニケーションは、そこでの感情からある程度距離を保ちつつ相手に伝わる言葉にするとという主体のあり様なくしてはできないことなのだと思う。また永田 (2002) の結果からは、特定の対人文脈で形成されている関係性のあり方が、他者一般にも普遍化されているか否かは、その個人の対人関係の成熟度を知る側面として重要なのであると考えられる。本研究でみられた友人関係のあり方も、こうした関係性の成熟の側面を表していると考えられ、そのような関係性の成熟がアイデンティティと関連することが示された。またアイデンティティ感覚に関連する共感性のありようは、友人関係と同様にその営みが自己のパーソナリティに統合されていることが重要であると思われる。一方で相手の感情を感じとろうとしすぎることは、アイデンティティの弱さが関連していることが示唆され、研究1の結果がこうした現象に影響された可能性が考えられる。

III 総合考察

現代の青年は友人とのあいだで互いに傷つかないように本音を言い合わない関係が優勢であると言われることが多い。「傷つきたくない」「嫌われたくない」という思いが強く、人との関係のなかで自分の思ったことや感じたことを出せないことは、この時期に必要な自己のアイデンティティ感覚を確たるものにするのにネガティブな影響を与えていると思われる。このような関係には自己の感情へ主体的にかかわることができる力が必要であると思われる。またそのような思いは相手の感情を感じとろうとしすぎることもつながっており、共感のあり方について今後検討していく必要があると思われる。